

# 【ねがいましては】

令和4年1月25日

KYOWA SCHOOL

第372号

「能動態」

ある日の新聞記事に、お笑いコンビ「コロキチ」のナダルさんの体験が載っていました。彼は中学1年生の時、2学期の中間テスト、チャイムが鳴ってテスト開始を待っている中、ひとりの女子が廊下で、「もうちょっと勉強させて」と先生に食い下がっていたそうです。ナダルさんは業を煮やし「いいかげんにせえよ。みんな待ってんねん」と言いました。その子は怒りながら席につきました。次の日の朝、女子に「おはよう」と声をかけても返事がありません。廊下を歩くと同学年の女子から「息止めよう」「目が腐る」と言われ、女子ほぼ全員から避けられるようになりました。女子が教室の黒板に、ナダルさんの似顔絵をぐちゃぐちゃにして、悪口を書いていた時も見ても見ぬふりをしたそうです。内心はきつかったそうです。1月の百人一首大会で、優勝して情勢を変えようと、冬休み中に猛勉強をしたそうです。本番当日、同じグループになった女子に「きっしょいな」（気持ち悪い）と言われたけれど、気持ちを切り替えて順調に札を取っていったのですが、中盤、女子と手が重なり、「イヤー！」という叫び声をあげられたそうです。ナダルさんは動揺したそうです。泣いたその子の背中をさすっていた別の女の子がナダルさんをにらみつけながら、「あとでせっけんで手洗っときや」と女の子に言っていたそうです。親には心配させたくなくて相談はできなかったそうです。いじめられていることを認めたくなくて、「負けへんぞ」と思ったそうですが、中3の頃に心が折れ、相手にこび、何か言われるとすぐに謝るようになったそうです。そんなことから女子が怖くなり、高校でも目立たないよう静かに過ごしたそうです。

転機は大学へ入ってから訪れたそうです。「暗いままではもったいない」と強く思い、話しかける練習をして、明るいふりをするところから始めたそうです。やがて隣の席の人としゃべれるようになり、友だちもできました。「面白いな」と言われ、お笑い芸人を目指したそうです。

そしてナダルさんは、ミュージシャンの甲本ヒロトさんのメッセージを掲げます。

<学校は電車のようなもの。乗り合わせた人は偶然、行く方向が同じだけで仲良しでも友だちでもない。学校も同じ年齢の子の寄せ集めだから、仲良くできなくて当たり前。でも、一人ひとりが目的地に着くのは大切>

このメッセージにナダルさんは救われたそうです。

女の子たちが全員でナダルさんを無視する光景、これを読んでいる女の子（含、以前女の子）は、リアルに感じ取ることができると思います。もし、自分だけが加わらなかつたら・・・心が締めつけられると思います。

このように青年期はとてこころの弱い時期でもあります。

恐怖は、「ひとりぼっちにされること」です。

ナダルさんの脱出方法は、「話しかける練習」でした。話しかけるという行為は、自らが動くということです。受け身ではなく能動です。じつは学校社会は受け身が多くなりがちです。授業は時間割りで設定されます。子どもたちの自由な選択は不可能に近いのです。仕方ない部分なのかもしれません。宿題も一方的に出されます。学校も行く、行かされる？ 椅子に座らされる。廊下に立たされる。などなど、じつとしていけば、どこからとなく「・・・しなさい」と、声がかかってきます。言われるままに素直に動いていさえすれば、まあ通常は「叱られる」ということもないでしょう。叱られないから悪いことはしていません。「これでいい」と思っている子どもたちがほとんどなのではないでしょうか。

またまたある日の新聞記事です。その方は高校時代に英語の授業中、なにかやらかしたのでしょう。先生から「出てけ！」と怒鳴られたそうです。で、その方、よほど癪（しゃく）に障ったのでしょう。本当に出て行ったのだそうです。そしてまた痛快なのが、それ以後二度とその先生の授業に出なかったそうです。またさらに痛快なのが、それが原因で英語が苦手になってしまっただけで生涯悔いが残ると思い、独学で英語を猛勉強、結果、英語が最も成績が良くなり、就職は語学を行かした海外駐在の銀行マンになっています。

この方は教師から全く納得のいかない「いじめ」にも似た行為を受け、それをバネに自ら独学という「能動」を手に入れました。

そうなんです。今のこの教育制度の中では、従順かつ素直に時間を消費さえしていれば、かなりの割合で「成績」というご褒美が同封され届きます。しかし、そのような中に何かもの足りない一抹の寂しさを感じていらっしゃるのでしたら、この方の生き様を是非片隅にしまっておいてください。そして「いざっ」と思ったその時に行動に移してみてください。そこにはひとつ注意することがあります。「冷静な判断」です。先ほどの方は、教室を出て行く際に「もう二度とこの授業は受けない。そのかわり、誰にも文句を言わせないくらいに英語を習得してみせる。」という判断まで出来たことです。そこにはその英語教師への感情も多分にあったと思いますが、が、ここで大きなプレゼントが待ち受けていることに、おそらく気づいていなかったと思います。やがて独学を続けるうちに「学びの楽しさ」に気づいたはずで

「なんて英語はこんなに楽しいのだ」です。実は自らが誰にも邪魔されずに学ぼうとする気持ちは、「本来の学び」の楽しさを発見する最短の方法だということです。

さあ、嘘だと思ふなら今から始めてみてください。「独学」は「能動」のかたまり。